

パネルディスカッション

『女性はなぜマンモグラフィを受けないのか？』

平成22年10月9日(土) ピンクリボンホリデー2010

～今、乳がんは18人に1人 勇気を出して検診に～



新潟はっぴー乳ライフ

Niigata Happy New-life

パネリスト紹介



【座長】 佐藤 信昭
新潟県立がんセンター新潟病院
外科部長



【進行】 小野沢裕子
フリーアナウンサー

【パネリスト】



山崎 理
新潟県福祉保健部健康対策課課長



大関 芳子
(有)ティンクルプランニング代表取締役



森澤 真理
新潟日報社 文化部部長兼務
編集委員・論説委員



栗山 靖子
(有)ビープロデュース代表取締役



八木沢真知子
新潟市保健所 健康衛生課



西條和佳子
NPO ワーキングウイメンズアソシエーション常任理事



海津 牧子
新潟県保健衛生センター健診課
診療放射線技師

【会場より特別発言】

大塚(新潟県労働衛生医学協会)
佐野宗明(新潟ブレスト検診センター)
田沢(あけぼの会)

敬称略

乳がんは日本女性に最も多いがんで、2003年では年間45,000人が乳がん罹患し、乳がんで亡くられる方は2007年には11,000人でした。一方、乳がんは早期に発見し、治療すれば9割以上の方が治癒すると言われています。マンモグラフィによる乳がん検診は早期発見への“扉”です。実際、マンモグラフィ検診が普及している米国や英国では乳がんによる死亡が減少しています。しかし、新潟県の乳がん検診受診率は16.9%(H19年度)と低迷しているのが現状です。そこで、本年5月に実施した一般女性へのアンケートをもとに、乳がん検診を受けない理由を明らかにし、その具体的な対策と今後の乳がん検診のあり方について考えます。

小野沢: これより、パネルディスカッションを始めさせていただきます。私、この会の進行を務めさせていただきます。小野沢裕子と申します。今日は、パネリストの一人としても参加させていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

佐藤: 新潟がんセンター外科の佐藤です。

私自身は外科医ですので、検診を受けられたあとのことで、精密検査が必要だという方の診察をさせていただいて、もしがんが見つかったら手術、あるいはお薬の治療をさせていただいております。その中で感じることは、早く見つかったよかったねと元気になって帰られる方もいらっしゃいますし、中には残念ながらもう少し早く見つければよかったのにと、残念な結果に感じることもあるわけです。そのようなことで、病院の中にだけいてはいけないなということで、検診推進のこういう機会があれば、お手伝いをしているところであります。よろしくお願い致します。

山崎: 新潟県健康対策課の山崎です。がん対策というのが私どもの仕事ですが、その他にもいろいろな仕事があります。この朱鷺メッセには他の仕事でも何度も来ましたが、今本当にかんの問題は大きな問題になっています。新潟県でも最大の健康対策の問題だと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

八木沢: 新潟市で乳がんをはじめ他のがん検診全てを担当しております。いかにして皆様から検診を受けていただけるか、そして精度の高い検診を提供できるかスタッフ一同一緒に考えています。どうか皆様よろしくお願い致します。

海津: 新潟県保健衛生センターでマンモグラフィの撮影を行っている診療放射線技師です。よろしくお願い致します。

森澤: 新潟日報で医療問題なども書いております。やはり医療問題を書いている以上、自分もがん検診を受けていなくてはいけません、自分をはじめに毎年受けております。どうぞよろしくお願い致します。

大関: 子供に対する仕事をしており、月曜から日曜まで非常に忙しくしており、マンモグラフィ検診に関してはけっして優等生とは言えません。よろしくお願い致します。

栗山: イベント企画会社の代表をしております。ここでは50代女性代表ということで、マンモグラフィを受けていない不謹慎ものという形で参加させていただきますが、検診を受けなければいけないという納得がいくような説明をお聞きし、これからは検診を受けられるように今日は勉強していきたいと思っております。よろしくお願い致します。

西條: 新潟県内で働く女性の異業種交流会の運営をしております。私は39歳と出産が遅かったので、子供がまだ小さく、私も長生きしたいと思い、マンモグラフィ検診は40歳になってから毎年受けております。あわせて昨年実家の母が卵巣がんで亡くなりました。比較的遺伝性があると言われているので、毎年の子宮がん検診と、半年ごとの卵巣がん検診と、検診に関しては比較的優良児です。あわせて、グリーンケアアドバイザーの資格を今年取りました。やはりがんになると本人が一番つらいですが、家族もせつないで、そういう意味でも検診を受けていただきたいと思っています。よろしくお願い致します。

佐藤：はじめに、なぜ乳がん検診を受けなければならないかという
ことで、いくつかの資料を紹介したいと思います。

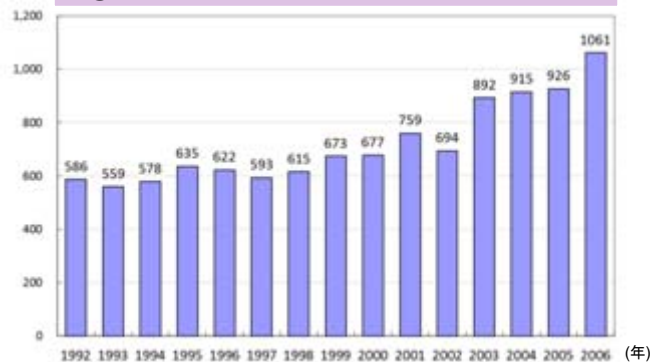
①まず新潟県の乳がんの発生状況に関しまして、新潟県の女性の乳
がん、年次別の罹患数で、1992年から2006年までのグラフです。
1992年では586人、2000年には677人、さらに2006年では1061人と、
かなり急激なカーブを描いて増えているのがわかります。このような
中で、乳がんが早期に見つからないと残念な結果となるわけで、今は、
18人に1人が乳がんになると言われている時代であります。

②次に、どの年代の方が乳がんになりやすいかという罹患年齢を5才
毎に分けて描いた図です。45歳から55歳という働き盛りの年代に罹
患率のピークがあります。以前は、この年代を過ぎると罹患率は下
がる、リスクは下がると言われていましたが、最近では、55歳、60歳
過ぎてもあまり減らない状況です。

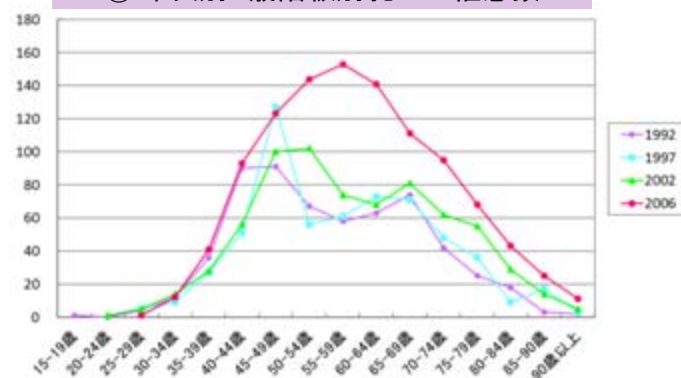
その一つの理由としては、食生活の変化などで、閉経後、特に肥満
の方はリスクがあるわけです。食生活の中で、大豆や豆腐などを摂っ
ている方は比較的风险が低く、昔は、年配の方はたくさん摂ってい
らしたと思います。あと、テレビ・映画などで若い人の乳がんを取り上げ
られていますが、それほど頻度がないことがこのグラフからわかります。

③当院で治療させていただいた患者さんの10年生存率のグラフです。
ステージは病期の進み具合を表します。早期のTIS、超早期から、IV
期かなり残念ながら進んでしまったものまでで比べてみますと、ス
テージ I は、10年経っても95、96%の方が生きておられます。これ
でわかるように、腫瘍が2cmより小さな段階で乳がんを見つけることが、
いかに大切であるということがわかってと思います。

①新潟県の女性 年次別乳がん罹患数

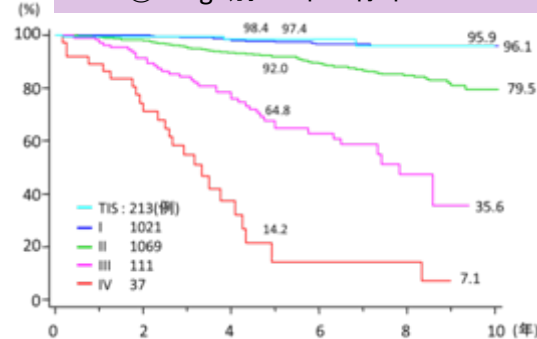


②年次別5歳階級別乳がん罹患数



「新潟県のがん登録」より

③Stage別 10年生存率



佐藤：新潟県の検診の状況を説明します。

昭和62年から検診が始まり、最初は視触診で、マンモグラフィはなかったわけです。平成12年になり、視触診に加えてマンモグラフィを隔年で取り入れましたが、この時代はまだ、視触診が主たる方法でした。平成16年になり、マンモグラフィが先じ、これに合わせ視触診もしてもいいですよということでもあります。平成19年には、「第3次対がん総合研究事業」で、乳がん検診における超音波検診の「有効性を検討」をしている状態であります。まだ現在のところ、乳がん検診の基本はマンモグラフィ検診であります。

では、ここでマンモグラフィとはどういうものを海津さんに説明していただきます。

海津：スライド中央の、黒い台のところに乳房を乗せて、その上の透明のプラスチックの板ではさんでX線写真を撮ります。黒い台のところに、フィルムをセットして、X線は上の方から黒い台に向けて出てきます。

次、撮影方法ですが、「MLO」というのは、斜めから乳房を挟む方法です。先ほどの装置は回転しますので、装置を斜めに回転させ、脇の下に板をあわて、乳房を強く引っ張って写真を撮ります。一方向撮影の場合は、この方法で右左別に合計2枚撮影します。二方向撮影の場合は、斜めの他に、「CC」という上下から挟む方法で撮影し、合計4枚撮影します。マンモグラフィの撮影はこの様な感じで行っております。

佐藤：ありがとうございました。

わが国における乳がん検診の歴史

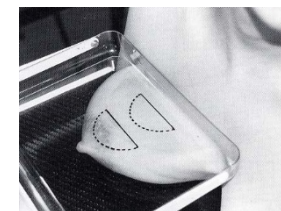
昭和62年 (1987)	第2次老人保健事業 30歳以上 (毎年)	視触診単独 (発見率:0.1%)
平成12年 (2000)	第4次老人保健事業(老健第65号) 視触診に加え 50歳以上にMMGを導入(隔年)	視触診+MMG
平成16年 (2004)	第5次老人保健事業(老老発0427001号) 40歳以上にMMGを導入(隔年) 40歳代は2方向撮影 50歳以上は1方向撮影	MMG+視触診 (発見率:0.3%)
平成19年 (2007)	第3次対がん総合戦略研究事業 乳がん検診における超音波検査の有効性を検討	



マンモグラフィ撮影装置
(新潟県保健衛生センター)



MLO



CC

佐藤: 次は、④都道府県別の検診受診率ですが、山崎さん説明をお願いします。

山崎: まず新潟県は見てわかるように平均より上で、全国的にみてもこの様なのですが、検診受診率が50%を超えないと、実際がんをがん死亡を減らす効果があるといわれているのが「50%」が最低ラインだと言われていています。一番高い宮城県でも32.9%。これは市町村検診、事業所の検診など全てをあわせたものですが、新潟県は23.1%で、50%の半分にも満たない状態で、今これをどうしたら50%にするかが大きな課題でございます。

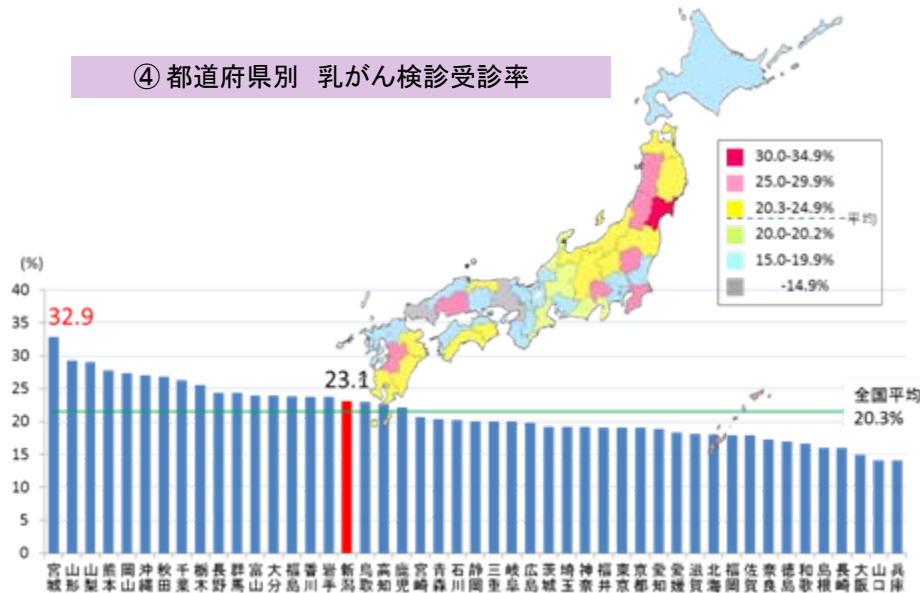
佐藤: 次は、⑤政令指定都市別の検診受診率を示します。これは八木沢さんお願いします。

八木沢: まず、この受診率を計算するための検診対象者数とその都市によって出し方が違うので、単純に比較はできませんが、一つの目安としてみていただきたいと思います。新潟市は真ん中くらいで、受診率が一番高いのは仙台市になります。仙台市では市民への啓発方法として、携帯電話から直接アクセスできるように、ポスターにQRコードを入れたり、通販会社と提携し、商品と一緒に乳がん検診のチラシを入れたりしているそうです。一般市民の乳がん検診への認識も高いのだなと思われます。新潟市でも現在企業と連携してがん検診の啓発や、啓発の対策をどのように行っていくといいか検討中であります。

佐藤: 料金の違いはありますか。

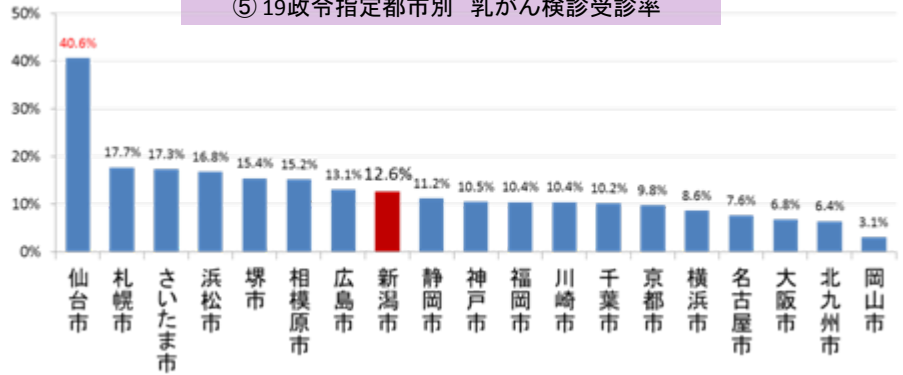
八木沢: 仙台市は、40-69歳が1400円、70歳以上は無料。新潟市は、40歳代は2方向撮影ですので1300円、50-59歳が一方方向撮影900円、60歳以上は無料で、また国保の方はこの半額で検診が受けられる形です。

④ 都道府県別 乳がん検診受診率



国民生活基礎調査による都道府県別がん検診受診率データ(2007年)
出典: 国立がん研究センターがん対策情報センター

⑤ 19政令指定都市別 乳がん検診受診率



「推計対象者数」を用いた市区町村がん検診の推定受診率(2007年)
出典: 厚生労働省調べ

佐藤：ありがとうございます。

市町村検診について八木沢さんに説明していただきましたが、仕事を持っている方は職域健診、職場の検診を受けていただくこととなります。

企業での検診に関してですが、これは厚生労働省のひとつの取り組みの例として、「がん検診企業アクション」をご紹介します。これは、企業内でも乳がん検診・マンモグラフィ検診を推進してくださいというもので、現在新潟県では、新潟日報社、労働衛生医学協会、三条信用金庫が積極的に取り組んでおられるようです。

ここで、職域検診についてご紹介いただきます。労働衛生医学協会の大塚さんに会場にお越しいただいておりますので、現在の職域検診の実情と企業内での取り組み、どのような啓蒙をなされているかということを少しご紹介いただければと思います。

大塚：新潟県労働衛生医学協会の大塚でございます。


私も労働衛生医学協会は、職域の健康診断と地域の健康診断の両方を行っております。職域の健康診断のなかでも、私どもの人間ドックにお越しいただく場合と、職場にマンモグラフィ車で行って巡回検診を行う場合の二通り方法がございます。巡回検診の場合は約1万人の乳がん検診を行っております。施設にお越しいただく人間ドックでは約2万人の乳がん検診を行っております。この数でもわかるように職場に巡回で行って行う検診が少し低調だとお分かりいただけると思います。話は飛びますが、私も私どもでは昨年、全国の9つの検診機関と一緒に、「全国健康増進協議会」という団体を立ち上げました。その団体を立ち上げた趣旨は、全国展開をしている企業や新潟県内の企業の方々の検診が少し弱いのではないか、またその奥様方の検

がん検診企業アクション

新潟県民のがん検診受診率。

乳がん検診受診率 40.4% <small>乳がん検診 135,926</small>	子宮がん検診受診率 30.6% <small>子宮がん検診 274,941</small>	大腸がん検診受診率 31.2% <small>大腸がん検診 245,673</small>
乳がん検診受診率 23.1% <small>乳がん検診 203,507</small>	子宮がん検診受診率 22.7% <small>子宮がん検診 280,692</small>	職域がん検診受診率 <small>職域がん検診受診率の向上を図るために、「がん」は、労働衛生や健康増進の重要な課題として、企業によって人間ドック検診、がん検診の「がん検診」の推進が求められ、乳がん検診、子宮がん検診、大腸がん検診の推進が求められています。</small>

新潟の企業・団体の目標と、がん検診受診率50%超もめざす国際プロジェクト



がん検診
企業アクション

がん検診企業アクション事務局
TEL: 055-3815-7922 FAX: 055-3827-1885
http://www.ganbensha.or.jp

がん検診企業アクション「国産」
「海外」

厚生労働省
 労働衛生センター
 〒100-0005 東京都千代田区千代田1-1-1
 TEL: 03-3568-1111 FAX: 03-3568-1112
 http://www.mhlw.go.jp

現在181企業・団体が参加

新潟県内では、
新潟日報社
(社)新潟県労働衛生医学協会
三条信用金庫

2010/09/29新潟日報朝刊

診への取り組みが少し弱いのではないかというところから、これが9つの機関での共通認識でした。そこで私どもは「レディース検診」というものを立ち上げて、全国の皆様とそして保険者の皆様にひろげ、これは昨年全国で2万人の実績がございました。乳がん検診、子宮がん検診、成人病検診などが全て一回で受けられるという内容のもので、非常にご好評をいただきました。が、県内では残念ながら150人程度の実績しかございません。これが職域健診の現状でございます。

また、私どもが「がん検診企業アクション」に参加している理由は、皆さんにがん検診を勧めるだけではなく、私ども職員に健康で働いてもらいたいという願いから、このプログラムに参加しております。

私どもの団体は約900名おります。そのうち、がん検診対象の年齢を35で区切りをつけまして、がん検診の対象者は500名

おります。うち350名が女性で150名が男性でございます。350名の女性のうち、子宮がん検診が4分の1しか受けておりません。個人的に受けているかもしれませんが、それは把握できておりません。乳がん検診は42%、これは私どもが用意した職員の検診を利用していただいております。これに比べ、胃がん検診は88%、大腸がん検診は85%などと比べると、女性特有のがんである乳がん検診、子宮がん検診の受診率が極めて低いことがわかります。私どもは、これを何とかしたいと、社内にも、企業の皆様にも働きかけております。雑観ですが、以上でございます。

佐藤: 大変貴重な紹介ありがとうございます。

あとひとつ、新潟日報社も参加されていらっしゃるということで、森沢さん新潟日報社での取り組みを紹介お願いします。

森沢: はい。新潟日報社では、2000年から女性の社員にアンケートをとりまして、子宮がん、乳がんの婦人科検診というのを、企業の負担で行っております。年齢は、現在全社員ということで、20代、30代、40代、50代全員です。そしてマンモグラフィについては人間ドックでのオプションというかたちで行っております。特徴としては、女性のプライバシーに配慮して、検査の結果が保健室に行くのではなく、まず個人に行き、そして個人で管理している形です。ただ課題もありまして、いま婦人科検診ですと、受けているのが3割弱くらい。20代、30代の若い社員が多く年齢的なものもあると思うのですが、どうしても受ける方が毎年特定、固定しているということで、仕事の忙しさにまぎれてしまうので、どうしたら時間のない中で時間を有効に使い、いかに受けに行くかが職場での課題となっています。以上です。

佐藤: ありがとうございます。

ここで企業に関して、一生懸命企業で検診に取り組んでおられる企業のうち9社の平均で、マンモグラフィを受けている数値ですけど、2006年 49%、2007年 66%、2008年 69%、2009年 77%と、これらの企業は65%の職員の方にマンモグラフィ検診を受けてもらうことを目標としているらしいのです。そしてそのカギとなるのが、体制の整備、費用の補助、受診勧奨、社内の旗振り役、社内連携、経営者の理解、といった要素が必要であると。こういった取り組みがなされているということを紹介させていただきました。

検診率を向上させる六つの要素

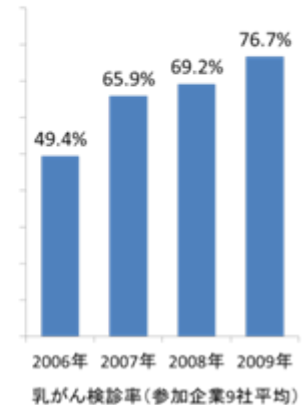
乳がん検診推進企業ネットワーク(乳検ネット)

- 検診体制の整備
- 検診費用の補助
- 受診勧奨の取り組み
- 社内における旗振り役の存在
- 社内連携
- 経営者の理解

すべての要素が運動したときに
検診率は上がる

【具体的に成果を上げた取り組み】

- ・ 検診バスを会社に配車する
- ・ 検診機関を会社に招へいし、社内検診を行う
- ・ 定期健康診断に組み入れる



佐藤: ここから、本日のディスカッションの本題になるわけですが、新潟はっぴー乳ライフでは5月のゴールデンウィークにアンケート調査を行いました。方法は、新潟市万代で無記名アンケート調査を行い、3日間で30歳以上の女性、合計763名の方からご回答をいただきました。

⑥アンケートにお答えいただいた年代別ですが、30代 33.2%、40代 26.1%、50代 17%、60代 14.4%、70代8.9%とやや30代が多かったです。

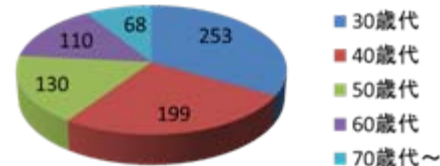
⑦「マンモグラフィ検診を受けたことがありますか？」とお聞きしたところ、「ある」とお答えになった方は52%、「ない」とお答えになった方は48%でした。

「ある」とお答えいただいた398名の方に、⑧「最近はいつ受けましたか？」とお聞きしたところ、そのうち75%の方が2年以内に受診されており、⑨検診場所として、住民検診38%、職域検診27%、人間ドック23%、受診中の医療機関9%の内訳です。

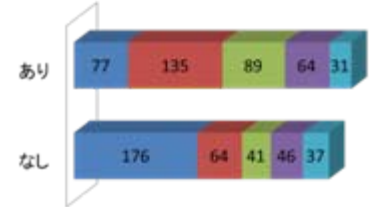
次、⑩「どうなったらもっと多くの方が検診を受けますか？」とお聞きしたところ、費用が安く無料になったらが一番で、次、土曜・日曜の休日でも受けられたら、早期発見の重要性をもっと知ったら、住民検診の日程がもっと増えたら、献血センターのようにまちなかで受けられたら、女性スタッフなら、医療機関でも受けられたら、献血車のように休日スーパーなどでも受けられたら、検診機関でマンモ単独でも検査できたら、誰か一緒に行く人がいたら、の順のお答えでした。

また他の意見として「痛くなかったら」「痛みを少なくして」とありましたが、なぜ痛みが出るほど挟まなくてはならないのかを、放射線技師の海津さんからご説明していただきます。

⑥ Q. あなたの年齢は？

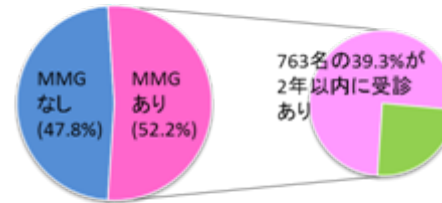


⑦ Q. マンモグラフィ検診を受けたことがありますか？

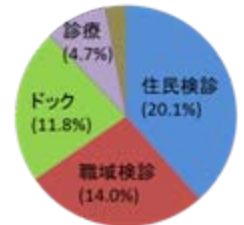


マンモグラフィ検診を「受けたことがある」と答えた398名にお聞きしました

⑧ Q. 最近はいつ受けましたか？

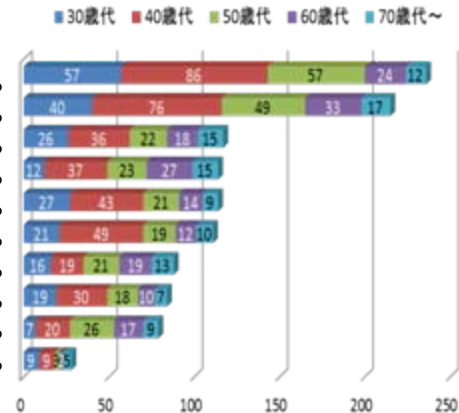


⑨ Q. どこで検診しましたか？



⑩ Q. どうなったら、もっと多くの方がマンモグラフィ検診を受けますか？

- ⑥検診費用が安く(無料)になったら
- ①土・日など休日にも住民検診が受けられたら
- ⑩乳がんの早期発見、検診の重要性をもっと知ったら
- ②住民検診の日程、時間がもっと増えたら
- ④献血センターのように、まちなかで検診が受けられたら
- ⑧女性スタッフなら
- ③以前のように医療機関でも検診を受けられたら
- ⑤献血車のように、休日スーパーなどで検診が受けられたら
- ⑦検診機関でもマンモグラフィ単独の検査を受けられたら
- ⑨誰か一緒に行く人がいたら



海津: まず、乳房を強く挟んで薄く引き延ばす理由ですが、1つに乳腺組織の重なりを広げるため、2つ目は被ばく線量を少なくするためということです。

乳房の乳腺は立体的に存在していますので、重なったままですと、そこにある病変が隠れてしまい見つかりにくくなってしまいます。強く挟んで薄く引き延ばすことが必要となってきます。痛みというのは、それに伴って発生してきます。撮影を行う少しの間はご協力していただきたいのですが、痛みの感じ方には個人差もごさいます。年齢による乳腺の発達具合や、その時のホルモンバランスによっても変わってきます。もし、撮影中に、痛みが耐えられないようでしたら、撮影している技師に言っていただけましたら、必要以上に圧迫はしませんので、あまり怖がったりせずに安心して受診していただきたいと思います。

佐藤: ありがとうございます。

被ばく量を少なくするためにそしてきれいな写真を撮るために圧迫する必要があり、それで痛みが伴うようですが、実際受けたことがある西條さんは痛みに対してはどうでしたか？

西條: 確かに強く押されますが、我慢できないことではないです。でも、乳腺の張り具合とか、生理にも関係してきますので、それに気を付ければよいので、みなさん痛い、痛いと言い過ぎじゃないかという気がします。また、いくつか数える程度で終わってしまうので、あまり気にすることではないのではないのでしょうか。

大関: 実は、これに参加するのに、数日前に検診を初めて受けてきました。受けてみて、思っていたほど、人から聞いていたほど痛くはなかったですし、時間も短かったです。技師の方に「もう少しですからがんばりましょう」と声もかけていただいたり、思っていた以上に簡単に思えました。

佐藤: 今まで受けたことのない大関さんがこのために受けられたというのは、このパネルディスカッションをやったかいが、少しでもあったんじゃないかと思います。

栗山: 私は受けたことはないのですが、友人の「痛かったわ」という声印象に残っていたということと、医療機関では、女性医師や女性検査技師さんは少ないので、男性の方にあたると恥ずかしいというのが重なってまだ受けていないのです。また職場の検診ですと、胃がん検診とは違いオプションで付いているということもあり、まだもやもや感があります。

佐藤：次、検診を受けたことが「ない」と答えた方に、

⑪「なぜマンモグラフィを受けないのですか？」お聞きしました。40歳以下の方は検診の機会がないからですが、40歳以上の方では、仕事が忙しくて、予約手続きが面倒、検診費用が高い、痛いと聞くので、住民検診の日程が合わない、家事が忙しくて、男性スタッフがイヤ、乳がんにならない自信がある、どんな検査をするかわからない、受けなくても平気、興味がない、周りで受けている人がいない、人間ドックでマンモ単独で受けられない、住民検診が定員オーバーの順でございました。この他の意見で、どこで受けたらいいかわからないという意見もありましたが、八木沢さん説明していただけますか。

八木沢：新潟市の場合、検診車での集団検診になりますが、居住区以外でも受けることができますので、ご希望の日程をさがして受けていただけます。また個人負担が高くなりますが、検診機関でも受けることができます。

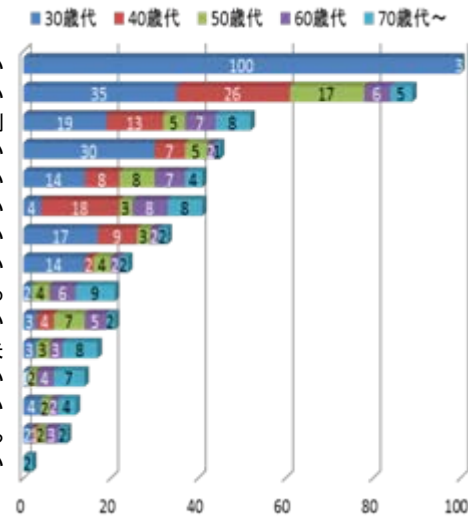
佐藤：では、⑫「どうなったら受けてみようと思いますか？」とお聞きしたところ、費用が安くなったら、女性スタッフなら、検診年齢になったら、土日・休日に受けられたら、今年こそは、まちなかで、乳房に何か異常を感じたら、住民検診の日程が増えたら、休日スーパーなどで、検診機関でマンモ単独でも受けられたら、誰か一緒に行く人がいたら、という順のご意見でした。

ここで1つ「乳房に異常があったら」とありますが、乳房に異常がない時に受けるのが検診で、少しでも異常があったら検診ではなく医療機関に受診していただくことが大切です。

マンモグラフィ検診を「受けたことがない」と答えた365名にお聞きしました

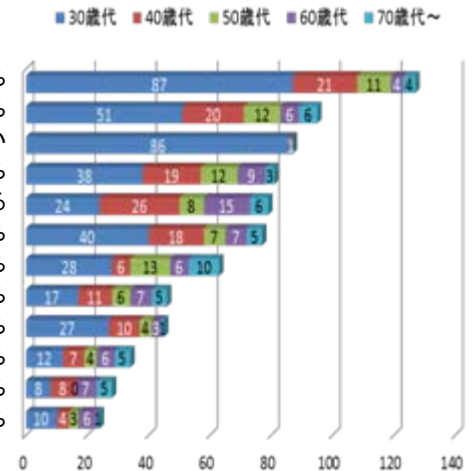
⑪ Q. なぜ、あなたはマンモグラフィ検診を受けないのですか？

- ① 40歳以下のため、検診を受ける機会がない
- ② 検診に全く興味がなく、受けたいと思ったことがない
- ③ どの検査をするのか分からない
- ④ マンモグラフィ検査は「痛い」と聞くので、受けたくない
- ⑤ 男性スタッフの検査を受けたくない
- ⑥ 仕事が忙しく、検診に行く時間がない
- ⑦ 家事が忙しく、検診に行く時間がない
- ⑧ 検診費用が高いので、受けない
- ⑨ 人間ドックでは他の検査も受けなければならないから
- ⑩ 住民検診はいつも定員オーバーで受けられない
- ⑪ 住民検診の日程が少なく、都合にあわない
- ⑫ 予約などの手続きが面倒
- ⑬ 今まで受けなくても平気だから、受けなくても大丈夫
- ⑭ まわりで受けている人がいないので、私も受けない
- ⑮ 乳がんにならない自信がある



⑫ Q. どうなったら受けてみようと思いますか？

- ① 40歳になったら、是非受けてみたい
- ② 今年こそは受けてみようと思っている
- ③ 献血センターのように、まちなかで検診が受けられたら
- ④ 住民検診の日程、時間をもっと増えたら
- ⑤ 献血車のように、休日スーパーで検診が受けられたら
- ⑥ 検診機関でもマンモグラフィ単独の検査を受けられたら
- ⑦ 検診費用が安く(無料)になったら
- ⑧ 乳房に何か異常を感じたら
- ⑨ 以前のよう医療機関でも検診を受けられたら
- ⑩ 女性スタッフが検査するなら
- ⑪ 一緒に検診へ行く人がいたら
- ⑫ 休日スーパーなどで、検診機関でマンモ単独でも受けられたら



佐藤: アンケートの結果を見ての感想をあげぼの会の田沢さんから、一言お願いできますか。

田沢: あげぼの会の田沢と申します。私は35歳の時に父が膵臓がんでなくなったことがきっかけで、がん検診を受け始めました。婦人科医で視触診検診などのがん検診を受け始めました。40歳から主人の職場検診の付属でエコー検診を受け2年後、42歳の時に乳がんの影ということで引っかかりました。実は1年間精密検査をためらいまして、43歳の時に再度受け、がんという診断を受けまして、44歳で右乳房の温存手術を受けました。1.2cmと早期だったで、手術のみでこの後の治療なく、今6年目になります。1年に1回がんセンターへ定期検診に行きます。

がん患者の会を第4日曜日に各月1回行い、様々な患者さんの声を聞きますと、あの時もう少し早く行っていれば・・・という後悔の声も聞かれます。「あの時」というのは、お友達ががんになったとか、がん検診にひっかかったとか、自己触診で気になった時とか様々ですが、仕事が忙しい、家族の介護が忙しい、子供の進学で忙しいと、ご自身の健康を二の次にされてしまいます。自分の健康を後回しにしても、家族の生活を優先させてしまいますが、病気になると、家族の生活は一変してしまいます。どうぞ勇気をもって検診のはじめの一步をお願い致します。

佐藤: 貴重なご意見ありがとうございます。
実際、乳がんを経験された方からのご意見でした。

佐藤: では、どうしたら検診に行くのか？と、先ほどアンケートの結果もありましたけども、対策ですが、まず費用の面で市町村検診では、という具体的な数字などあげていただけますか。

八木沢: 新潟市は、40歳代は2方向1,300円、50-59歳が一方900円、60歳以上は無料、また市の国保加入者はこの半額で検診が受けられます。また、昨年度から、国の事業である一定の年齢の方に無料クーポン券を交付しています。

H21年度に乳がん検診の無料クーポン券を発送した方は、新潟市で28,625人。このうち、20%の方が来るのではないかと予想したのですが、受けられたのは5,502人で、受診率は19.2%でした。でもその中で、初めてマンモグラフィ検診を受けられた方が6割いらっしゃったので、初診の方への受診勧奨としては良かったと思います。通常の受診と合わせ、前年度より3.1%アップし、一定の効果はあったかと思います。

その半面、クーポン券が届いていても行かずに期限切れになってしまうこともあり、単純に無料になったら受診率が上がるとは、いちがいに言えないと思います。一時的に上がってもそれが続くかといった疑問もあります。しかし、乳がんのことを知っていただくことや、どうして検診を受けなければならないかといった、検診の必要性をどんどん周知していかないといけないというのを考えているところです。

佐藤: 費用のことで、もう少し聞きたいのですが、栗山さんはどのくらいなら、ということはあるますか？

栗山: 先ほど小野沢さんからも職場のオプションでは5～6000円くらいかなと伺ったのですが、今、住民検診だと1000円くらいで格安に受けられると知って驚きました。

佐藤: 西條さんは、毎年受けていられると言われていましたが、ドック検診ですか？

西條: 私は、自治体で受診していますが、でも、受けるまでも大変で、日程を見て、この日なら受けられるというのを決めて、実際申し込むまで、定員に入ればいいのですが。もっと土日の日程を増やして、選択肢が多ければ楽だと思います。

佐藤: 土日など選択する日程が多ければ、ということですが、今行っている、県の乳がん検診モデル事業に関して山崎さんの方からご説明していただきます。

山崎: 新潟市をはじめいくつかの市町村で、検診を受けやすい日・場所などを考慮して、この10月の3日、10日、17日・・・と1週間に1回、人がなるべく多く集まる所に乳がん検診車を設置してマンモグラフィ検診を行うという試みを始めました。第1回目を3日に行ったところ、予想を上回る方が集まったと聞いています。実際、自治体で行う検診は費用が安いですが、これは税金が投入されているからですが、でも日程が少ない。これにも理由があります。土日もずっと検診を行っていれば自治体の職員も休みなしで出なければならない。公務員ですので、またこれも難しい問題があります。受けやすい体制と、費用がどれくらいになったら一番受けていただけるのかというのはこれからの研究課題かと思っています。

1つだけ申し上げますと、新潟市のイオン南に五泉市の方が大分来られていたのですが、実は五泉市の料金が高いわけではなく、およそ1000円です。1000円のところ500円を払い、わざわざ新潟市まで受けにくるというのは、ただ料金だけの問題ではないようにも思えます。やはり休みの日に受けられるというのがいいのではないのでしょうか。

佐藤: また、血液センターのように決まった場所で受けられる所があるといいとあるのですが、他の政令都市ではどうなのでしょう？マンモ検診常駐の場所はあるのでしょうか？

八木沢: 他の都市でもそういった場所はないようです。

新潟市では検診車の巡回の検診のみですが、他の都市では、検診センターや医療機関などでの施設検診も行われています。そういった施設検診に関しては新潟市でも考えているところです。今10月11日に検診会場でアンケート調査を行っていますので、その結果をもとに検討していきたいと思っています。

佐藤: そういったアンケートの結果については、新潟市もそうですが、新潟県としてはいかがですか？市民の要望に対しては？

山崎: アンケートもそうですし、インターネットでもご意見等いただきますが、一番影響があるのは、議会に取り上げられることなんです。今、子宮がん検診については一生懸命議会で質問が上がっています。今9月定例会の真っ最中ですが、子宮がん予防ワクチンの話、質問がすでに7つくらい出ました。乳がんも注目されてしかるべきと思いますけど、議会に質問を出していただくくらい、こちらでも盛り上げていただきたいと思っています。

佐藤: ありがとうございます。費用の面、検診のアクセスといったお話をいただきましたが、世論といった皆さんの声をいかに上げていただくか、そして、その声をいかに届けるかも大切で、マスコミに取り上げていくことも大切かと思えます。森沢さんいかがですか？

森澤: 情報のツールは様々あります。新聞、TV、インターネットなど、まあ、立場上新聞が一番性能がいいと思っていますけども。実際問題、今、情報の「量」自体はものすごく量があるわけです。例えば、チラシを1000枚配るところを2000枚配ったところで、一気に検診受診率が上がるかというところではないですね。「量」ではなく、「質」の問題だと思います。

例えば、検診は重要だとわかっているけれども仕事がある、介護がある、子育てがあると、日常行為を優先させてしまうわけですから、どうしたら自分のためにとか、受けるためにどうしたらいいのか、とか「質」の問題を伝えていくのが大事だと思います。

私が乳がん検診を受けている理由は、色々伺ったんですが、一番納得した情報というのが、乳がんは1cmくらいにならないとなかなか見つけられない。小さすぎるとわからないそうです。その1cmの乳がんになるには10年15年かかるそうなので、今現在私の中にもあるかも知れないわけです。そして1cmになってから2cmくらいになるのは1～2年ぐらいでなってしまう。そして、2cm以上になると、その後は治療がすごく大変になってしまう。だから早期に1-2cmくらいの間で見つけるためには、1～2年のうちに見つけなければならない。だから一生懸命検診しなければならない。チャンスを逃してはならないと、このように自分で認識しています。

佐藤: ありがとうございます。

こうスライドをいっぱい出してするといっぱい伝えた気になるのですが、何が一番効果があるかというところ、くちコミなんですね。なぜ痛いとかとか、今日聞いた大事なことを、二つ三つくらいを覚えていただいて、ぜひ、ご家族、ご友人にも伝えていただきたいと思えます。

佐藤: 大関さん栗山さん西條さんは異業種交流人材交流などを行っているということですが、女性の皆さんはどうしたら自分の時間を作りやすいですか？時間のやりくり、コツなどはありませんか？

大関: コツというか、今回他のスタッフにも聞いてみたのですが、仕事についてはやりくりはつくと思います。検診を受けても受けなくてもいいというのではなく、必ず受けなさいよ！ということであれば、仕事の中でスケジュールを調整して行くことができます。強制的なことであれば、主婦の方も行くかと思えます。

栗山: 私くらいの年代になると時間のやりくりはできるのですが、小さいお子さんがいたり、介護があったりすると、その間誰かに見えてもらわなければならない時に、情報がたくさんあれば、公共的な施設を使って時間を作り出すことが可能になると思えます。

西條: 私たち団体では夜研修をよくやるのですが、例えばそういう団体の所に検診車が来てやっていただけるのであれば、施設を探すとかむりやり時間の調整をするよりは、もしも10人20人といった単位でも可能であればWWAで検討してみたいと思います。

佐藤: 先ほど、強制的にとありましたが、韓国では受診率があつという間に50%になりました。これはかなり強制的な要素があるようで、韓国では個人登録カードがあって、マンモグラフィ検診を受けているかどうか把握されており、もし受けていなければ個人宛に行ってくださいとか勧奨があるわけです。

料金に関しては無料または低額に抑えるとか、政府が強力に後押ししているようです。日本ではまだなかなかできないと思いますが、そういった強制でなくても、皆さんが自発的に行っていただけるように我々は情報を発信していきたいと思えますし、皆さんも伝えていっていただけたらと思います。

小野沢: 「なぜ行かないのか？」と、こうして料金や、時間の問題、情報の質の問題とかありましたが、もしかして、50歳過ぎれば大丈夫かもしれないという風潮がどこかにあったかもしれない。

ところが50歳を過ぎてもカーブが上がり、50歳を過ぎても安心できない、安心できる年齢がないということが今日わかり、皆さんの話を伺って、また森沢さんの「検診しないとキャッチできない」というのを伺って、やはり1年に一回、2年に一回、自分の体を守るために検診を受けなきゃって思いました。

それと、企業の場合、トップにいる男性が「君の存在は会社にとっても、家庭にとってもかけがえのない存在で、これが検診を受けなかったために発見が遅れたとしたら、企業にとって家庭にとって日本にとって新潟にとっての損失だ。だから受けに行け！」と言っていたくらい、特にトップの男性がしてくれる状況になったらみんな行くなと思ったのですが、いかがでしょうか。

またJRの吉永小百合さんがやっておられる大人の休日クラブとかとコラボレーションして、50歳になったら大人の休日クラブ、友達と旅行に行く前に、マンモに行きましょうとか、アラフォーマンモとかアラ50マンモとか、GOGOマンモとかの言葉を作って、浸透させていったらいいなと思えます。

小野沢: それにはどこでも受けられる機関がなければいけない、どこでも受けられる機関を作る必要があるかと思いますが、それができないのは何が問題なんですか？まちなかに血液センターと同じようなものが作れないのは何か弊害があるのですか？

山崎: マンモグラフィをやるために、そしてマンモグラフィをやって精密検査が必要だとなった方に確定診断を行うためにはある一定のレベルが必要です。これら撮影や診断には一定のハードルがあり、そこにちゃんと加わってやっていただくための条件があります。その条件にあったものを増やしていくことが大事なんです。

もうひとつ大事なのが、受け皿になる精密検査までやってくれる所が必要なのですが、そのような機関の数が新潟県内ではまだ十分ではない。保健所管内で見れば最低一か所ずつはありますが、新潟県の医師不足とかの問題も全部関係してきます。精密検査に行く人の割合もありますが、見落としがないようなところまで、ギリギリにしぼっていく、精密検査を受けたけど大丈夫でしたよという方もかなりいらっしゃるわけですが、みんな繋がってくる問題です。実は、「検診を受けましょう」と言っていますが、今の2倍の方が受診した場合、新潟県の検診機関、医療機関がパンクしてしまう状況にもあります。ですから、あわせて検診機関のキャパシティ、精密検査を行える医療機関のキャパシティを同時増やすことも一生懸命水面下でやっています。

佐藤: 精検施設に関して、佐野先生コメントをお願いします。

佐野: 補足しますと、マンモグラフィは非常に高額な機械で、学会でも指定された機種でなければなりません。それを正しく撮影する海津さんのような技師。今新潟県で150名位ですか。そしてそれを読影する医師。こちらは新潟県で120名位。これらは全て試験制度です。これが三種の神器で、この三つがそろっていないと精度の高い検診とは言えません。そうなると県内どこでもすぐに作れるわけではないのです。

そしてもう一つ、精密検診機関ですが、精密検査をする施設は、手術へ直結できる医療機関で、保険証を使った検査をします。検診で約1000人が検診を受けるとすると、そのうち約1割の100人の方が要精検になるわけです。皆さん要精検となるとすぐに癌だと思われるかも知れませんが、そうではありません。そのうち95%の方は良性でなんでもないので、そのことは覚えておいてください。

ついでに一言言わせてもらいます。日本は韓国と隣同士でお互いに負けないぞと思っているわけですが、乳がんになって死亡された率、これが、アメリカは19%-20%弱、日本は25%、韓国は数年前までは27%だったのが、あつという間に今22.3%になりました。日本も韓国での対策も真摯にうけとめて、受診率を50%にしないと、これから日本も乳がんが死亡する方がどんどん増えていくわけですから、今後死亡率を下げるためにもぜひ、マンモ検診を受けていただきたいと思います。

佐藤: ありがとうございます。最後に皆さんパネリストから一言、感想をお願い致します。

西條: 私は母が卵巣がんで亡くなり、癌がかなり身近なものなんですね。今日一番印象に残ったのが、乳がんは早期に見つければ、1期であれば、95%の方が10年以上生きられる。元気でいられる。これはすごく勇気になりました。女性が病気になると、男性がなった時より家族への負担が大きくなると思うんです。ぜひ自分のことだけでなく、自分の身近な人のためにも検診を受けなければならないと思いました。

栗山: 私は乳がんというものを非常に考えさせられました。だれでもががんになりうると伺い、検診に行かなければならないと自覚を持ちました。自分のからだは自分で守らなければならない。そして、社員の人にも話していかなければならないと思いました。女の人はとてもおしゃべりなので、検診を受けた方がいいわよと伝えていくことも大事だと思いました。

大関: 私は仕事柄、おかあさんや子供たちと接することが多く、また20代の娘も二人おりますけども、そういう子供たちはまだ興味がないんじゃないかと思っています。行政の方にはお願いですが、お母さんの出産後の指導の中に取り入れたり、高校生のうちから保健の授業の中でも、こういうことをしていれば、受けていれば、こういうことにはならないという具体的な指導をしていただいで、今後の10年後20年後の、今後の乳がんのかかる率を減らしていただきたいと思います。

森澤: この間色々医療の歴史を調べたのですが、昔はがんで亡くなっている方は非常に少なく、感染症で亡くなっている方が多いんです。今でも世界の各地では医療を受けられず亡くなっている方が沢山いらっしゃいます。私たちは、がんになるまで長生き出来て、がんになって当たり前という感じなんですけど、そこまで医療が発達し検診を受ければ早期に発見できるかもしれないと、そういう時代に生きていられることはとても幸運だと思います。この幸運なことを生かして、ちゃんと検診を受けなければいけない。あと、女性はなかなか忙しく、自分のことは後回しにしてしまって、女性は仕事とか家事とかいろんなことをやっちゃうんですが、ぜひとも、男性の方、パートナー恋人でもいいですが、ぜひ、家事でも何でもやるから、一日検診に行ってくれ！となったら非常にいいと思います。

海津: このお話をいただいた時に、マンモグラフィは痛いから、という意見が多いというお話を聞いたので、実際受けた方にどのくらい痛いアンケート調査をとってみたのですが、実際は思ったほど痛くないという方が多く、これからは、受けたことがある方は、受けたことのない方へあまり痛かった、痛かったとあまり言わないでもらいたいです。今度はもし痛かったら「力を抜いて」と伝えていただきたいです。

八木沢: 行政の立場から、受けやすい体制をつくっていかなければいけない。乳がん検診は他の検診に比べてよりガイドラインが厳しく作られています。その中で皆さんが受けやすいように検診の数を増やしていければと思っております。新潟市保健所の協力を得て、乳がん検診検討委員会を立ち上げました。委員長にはそこにいらっしゃる佐野先生になっていただき、精度管理、受けやすい体制について検討中です。40代50代の罹患率の高い年代から受けていただけるように今後も努力していきたいと思えます。

山崎: 私は行政におりますけど、一応医師でもありますので、乳がん検診になぞらえ、二方向で思ったことを言わせていただきます。まず、自分が医学生だった頃、乳がん検診は視触診でした。つぎ乳がんになってしまったらその治療も全部乳房を取ってしまうもので、リンパ浮腫とか、副作用というか合併症が出て大変だと、習ってきたのですが、今はマンモグラフィ検診ができ、手術も乳房温存ができ、覚醒の感があります。その間およそ20年。おおきな進歩がありました。そのためにわかりやすい情報をきちんと出していかなければならない。その面で、もうひとつの方向として、私どもの仕事、行政です。行政でがん検診をやるとがん一辺倒になってしまいがちで、もちろん掘り下げるのは大事なんですけど、先ほど小野沢さんのお話で、楽しいことと組み合わせるやっつけていく、相乗りでやっつけていく、こういうことも大切かと思いました。

あすイオンで行う乳がん検診モデル事業にもうひとつ「歩こう新潟大作戦」という楽しいイベントをくっつけておまして、今度くっつけられるのはすべて相乗りでやっつけていこうと、女性だけでなく、そこに来た人にも乳がん検診が大事だということを知ってもらおうキャンペーンもやっつけていこうなどと、ステージ上で皆さんのお話を聞いて考えておりました。私も今日は勉強になりました。

佐藤: 私は普段は病院内にいて、限られた環境でつつい視野が狭くなってしまうんですが、今日は沢山の方と一緒に、ぜひ乳がんで悲しむ人を減らさなければならぬと改めて感じました。

小野沢: 先ほどから、参加された皆さんの口からどんな方へ、たくさんの方へ伝えていただくことが大事だという話も出ておりましたので、いろんな人に伝えていただく、女性だけでなく男性の方にも若い方にも伝えていくことが大事だと感じました。みんなに伝えていくことが大事だと思いました。「なぜ検診を受けないのか？」でも本当は「受けたいんだ」と思っている人も沢山いるということもわかりました。

今日は皆様ありがとうございました。

当日は皆様より、90分にわたる大変有意義なディスカッションがおこなわれました。ここでは、その一部を抜粋し紹介させていただきました。